ワークショップ
「国際コミュニケーションセンターにおける外国語支援体制の紹介およびワークショップ」
8 月 5 日(木) 15:00～17:00

加藤雅之・柏木治美・石川慎一郎

神戸大学では、平成 15 年 10 月、外国語に関する研究及び、外国語科目に関わる教育の企画・運営・実施等を行う組織として、国際コミュニケーションセンターを発足させました。センターでは教室での授業と平行して、教室外での学習環境の整備を重視しています。本企画では、ランゲージハブ室を中心とした、センター活動の紹介と、CALL 室でコンピュータを実際に操作してもらう形でワークショップを行います。ワークショップではセンターの取組みの紹介のあと、1) スキルチェック、学力診断システムの導入と開発、2) コーパス言語学にもとづく、有効な語彙指導、3) ホームページを活用した英語授業実践などを行う予定です。

国際コミュニケーションセンターについて（パンフレットより）
21 世紀のグローバル化時代にあって、外国語の役割は大きく変動しようとしています。日常的にあらゆる国の情報が瞬時にキーボードで呼びだすことができ、さまざまなマルチメディアを駆使して、外国語に触れる機会が飛躍的に増大しています。学術研究の上でも国際協力がますます求められる時代にあって、外国語の運用能力を身につけることはきわめて重要になっています。そこで求められるのは、スキルを重視する運用能力だけでなく、異文化に対する深い洞察をともなった真のコミュニケーションでなければなりません。こうしたニーズに対応するため、神戸大学において、外国語に関する研究ならびに、外国語科目に関わる教育についての企画、運営、実施等を行うとともに、国際学術交流・留学のための外国語教育支援を行うことを目的として、2003 年 10 月、国際コミュニケーションセンターが設立されました。

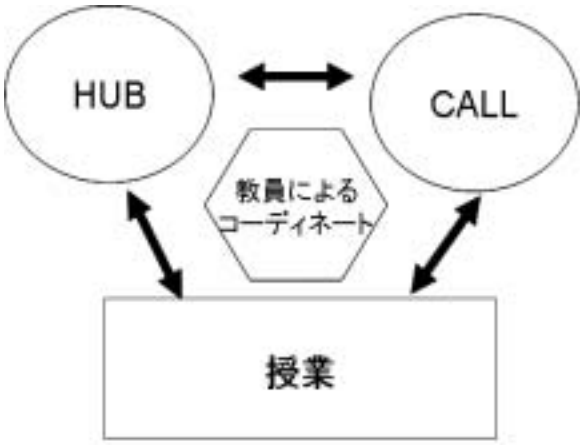

図１　語学学習環境の整備（授業・HUB・CALL の連携）イメージ

(1) スピーキング（リスニング）トレーニング診断システムの開発（柏木）
一般的に CALL 環境等を活用した学習は、学生個人の目的や興味に応じて学習できるという利点があり、新たな可能性を持っている。反面、個人の自発的学習が求められるため、学習の継続が困難である、学習内容に対してきめ細かい指導やサポートが受けにくい、といった課題点がある。また CALL 教材での学習が始まると、学生は、対コンピュータとの関係が多くなり、教員側の指導が難しい場面

も多々存在する。これらを解決するためには、CALL 等の学習環境と授業に連携を持たせ、教員側がこれらをコーディネートし支援していくことが重要であると考える。

一方、CALL 教材のコンテンツを見ると、スピーキングまでを含めたスピーキング（リスニング）学習システムは今後ますますその発展が望まれるものと考える。

これらをふまえ、図１のような CALL、HUB、授業そして教員による指導支援、という統合的語学学習システムを目指したスピーキング（リスニング）診断トレーニングシステムの開発を考える。本発表では、システムが考案最初の段階であるため、その概要や方向性について述べる。ここでは、発音・イントネーション・音の高低強弱等の音声レベル、パラグラフ・構文・語句表現、談話レベルといったスピーキングに必要なスキル項目を洗い出し、

・単文リピーティング、文の言い換え、パラフレーズ練習
・一定量の情報伝達、情景描写を目的としたタスクを取り入れた活動
・分類、比較対照、原因・結果といったパラグラフ意識したスピーキング活動

といった活動を行う中で、どの項目が弱いかといったスキルチェックを教員側が行える機能を作り、それをもとに学習者が発話(聴解)訓練を行えるシステムを開発する。このシステムにより、HUB 室ではネイティブが学習者の状況を意識した指導を行い、またオーラルを中心とする授業等との連携をも考えていくことができ、CALL･HUB･授業が連動したシステムを構築することが可能となる。

(2) CALL を用いた ESP 語彙力診断テスト（石川）

英語の 4 技能の習得において，その成否を決める要因の一つは語彙力である．英語学習における語彙力の重要性は広く認識されているものの，大学英語教育では，従来，語彙指導にあまりウェイトが置かれてこなかった．

本発表では，コーパス（大規模な電子化された言語データ）から収集した英語の原資料を用いて機械的に語彙リストを切り出し，一定の修正・補正を行った後，そのデータを使って語彙力診断テストを作成する方法について報告する．収集する資料にバイアスをかけて語彙リストを作成し，一般的な英語データから得られたリストとの差分を取れば，例えば法学部生用，医学部生用，工学部生用などと学習者の専門に特化した ESP 語彙テストを作ることも可能になる．

語彙力診断テストの開発に当たっては，形態・分量・評価システムという 3 つの面が問題になる．語彙テストの形態としては， Nation, Meara and Buxton, Meara, 望月などの先行実践があるが，日本人学習者の EFL 学習環境を考えれば，望月(1998「日本人学習者のための英語語彙サイズテスト」『語学教育研究所紀要』12, 27-53.)で提唱された和英選択型のテスト形式がもっともなじみやすいものと考えられる．

一般に，語彙力は英語力全体（4 技能）との相関性が非常に高いと言われており，語彙力診断テストを利用すれば，プレイスメントやアチーブメント（達成度）評価を簡単に行うことが可能になると思われる．

(3) インターネットを活用した英語授業実践（加藤）

本セクションでは、まず私の授業で実践している、Reading Report、Listening Report を紹介する。これは毎週の課題を HP 上からフォームを使って送付してもらい、自分の進行具合を振り返るとともに、他の学生の進捗をチェックし、フィードバックを得るようにしたものである。また、メルボルン大学の日本語学科の学生との交流（HP およびチャット、掲示板）の成果について報告する。学生にとって、どのタスクが英語学習において一番効果的であったかという観点から、こうした多様なタスク相互の連携、および有機的連関、あるいは最適化された組み合わせについて、考察および提言を行う予定である。